

岐阜県知的障害者施設家族会連合会からの報告

平成25年6月11日、チサンホテル新大阪で開催されました平成25年度全国知的障害者施設家族会連合会社員総会及び第1回理事会において、「デンマーク視察報告」（6/1成田出発、6/9成田帰国）の講演があり、日本の実情と照らし議論がされました。

幸福度が世界一のデンマーク（2013年国連調査）では、障害者の幸福がどのように守られ、追求しているのか。福祉先進国としてのデンマークの制度が取り入れられているはずの日本と何が異なるのか。日々障害者の幸せを願う私達が社会に訴えるについて、確かな認識が必要であり、その参考になればと思い講演内容を報告します。

- ・報告者 理事長・由岐透氏、副理事長・南守氏
ひょうごかぞくねっと副会長・木村三規子氏

●全体的報告・由岐理事長

今回視察したソノボー・コムネー（コムネーは市町村のような行政単位）は、デンマークで3番目に大きい町です。ドイツの北側で、陸続きの南の端に位置します（ドイツ国境に近い人口6万人の田舎町、参考：1番コペンハーゲン、2番オーフス）。

5年前にオーフスとフィンランドに行き、その翌年から毎年、竹内真澄さん（デンマーク在住者）とご主人のアルビー・ホルム氏が日本に来られ、神戸でお二人に講演を行って頂いていました。今年も11月に、夫妻が日本に来られる事をお聞きし、急に思いつき企画しました。

ご主人のアルビー・ホルム氏は、障害福祉に関わって、知的障害者の作業所で働き、既に65歳で定年になっていますが、福祉関係者に多くの懇意の方がいます。

視察スケジュールは、アルビー・ホルム氏が作り、幼稚園から老人施設に至るまで、系統的に組んで頂きました。着いた2日目は日曜日で休みのため、視察は6月3日から始めました。

最初に訪れたのは、自閉症者の居住形態居住施設。日本の入所施設とほぼ同じではないかと思いました。入居者と支援者との数が日本のような3：1，4：1と違って、1：1です。そこの施設長とNo2の方にどのような支援・処遇をしているかを見せてもらい、お話しをさせて頂きました。

11時過ぎから3年制の介護福祉士養成学校に行きました。学校の食堂が知的障害者の働く職場なのです。この食堂がどのように運営されているか、知的障害者がどういう形で働いているのかを見せてもらい、お話を聴かせて頂き、昼食もごちそうになりました。

昼からは成人の知的障害者活動センター、メディケアセンターへ行きました。これはのちほど木村さんから説明します。最後に、視察したところは、総括している行政側の障害領域担当部門で、その部門長と一緒に視察して頂いたシーナさん、その人の上司の方々と色々な話をさせて頂きました。

そこで、南さんが、「日本の福祉関係者は、ここに視察に来ましたか」と尋ねましたら、全くないとのお答えでした。日本人など見た事が無いとのことでした。

次の日は、ソノボー・コムネにある幼稚園に行きました。ここでは0歳から6歳までの子供達、身体障害のある人も含めた支援をしている通所の施設です。その後、成人の知的障害者のアクティビティセンターへ。ここは知的障害者の人の働く場所です。昼からは高齢者痴呆センターに行きました。

共同生活住居—訪問支援（デンマークではボーフェレスケブと言う）＜日本で言うGH＞と住居形態居住施設—支援スタッフ常駐（デンマークではボーフォームと言う）＜日本で言う入所施設＞が同じ敷地内にあります。ボーフォームは日本の入所施設の様な造りです。ボーフェレスケブは、何軒かの家が点在していて、そこに老人であれば老人が住み、支援者は各家を訪問します。知的障害者の場合は、共同生活住居（ボーフェレスケブ）に居ても、最大5時間の訪問支援しか得られません。そこで、その人達への支援が困難になると、住居形態居住施設（ボーフォーム）に移ってはどうかと勧めます。しかし本人が共同生活住居に居住したいと言えば家族、行政マン、施設の職員であろうと、本人の意思を無視して移すことは法律違反です。

この老人施設の職員（竹内さんはここで働いています）の話では、職員が「トイレに行こう」、「水を飲みに行こう」と言って手を引っ張ることも法律違反。何故かという、本人の意思に反した事を支援者はしてはならない。どんな時でも、本人の意思を尊重しなさいということです。

日本では、共同生活住居の形態をグループホームとしている。この形態をみると、日本のグループホームなどはとてもイメージできない。家が5軒・6軒建っている。一つの所に、皆が集まれる共通のスペースがあり、住んでいる人はここに行くことが自由に

できる。支援は、訪問介護支援者が共同生活住居に来てくれる。ここに住む人は何の不自由もない。これだけの違いがある。

今回の目的の一つは、グループホームというものが、日本と同じようであるか。

グループホームに住んでいる人は、日常の生活とか自分が薬を飲まなければいけない時、日本では一人で行ける、しっかりした知的障害者が多くいるが、何かの支援があるのではないかと考えていたら、ここでは、常駐のスタッフはいないが、コムーネ（行政）の職員が訪問介護をするので、本人は十分に必要な質と量の支援を受けています。

共同生活住居は日本のGHのようだが、日本でいう施設そのものではないか。デンマークでは、施設が無くなったと言われているが、日本の学者等がデンマークを観に行つて、一体全体誤解もはなはだしいとの印象を受けました。

4日は老人施設を見学し、夜はデンマーク障害者の親の会代表の方にホルム・竹内さんご夫婦の家に来て頂いて夕食をしながら、デンマークの障害福祉と日本の障害福祉について話し合いました。

障害者権利条約についても話題に出ましたが、全国ハンデイクャップ協会の役員をしている方から、「日本には知的・身体・精神などのハンデイクャップを持った人達の当事者、家族の希望を取りまとめて、色々な団体から出てくる意見を行政・政府、政治家に話していく組織は無いのですか」と質問されました。私はJD（日本障害者協議会）がそれと見え、あると答えましたら、南さんから日本には無いとの指摘を受けました。

翌日の5日は憲法記念日でしたので、アルビーさんの車で、奥さんの竹内さんも加わってドイツの南部の方まで観光旅行に行きました。

視察最後の6日は、セノボー・コムーネの障害領域の担当者のステインさんとラースさん、そしてチョンさんと懇談しました。ステインさんが施設長でラースさんが共同生活住居（ボーフェレスケブ）の8つを統括している人。チョンさんはセノボー・コムーネで障害福祉領域全体をみている人。セノボー・コムーネでは2013年から2015年までの障害政策の3年計画を練っており、今よりもっと良くしていくとか、デンマークも障害福祉従事者が減少する予測のもと、それをどうカバーしていくかという事も含め検討している段階だそうです。

チョンさんは、30代位で物凄く優秀な人でした。日本のように同一の職場から選ぶのではなくて、何も関係ない部署からでも適任者を選んで、その計画を推進していく人をトップに持ってくるということでした。

●木村ひょうごかぞくねっと副会長

以前、家族会の八木さん、南波さんがデンマークに行かれた報告を聞いて、日本のグループホームはホームではないという事が一番気になっていたのも、見学させて頂きました。

なんと、一つのGHが、私が住んでいる家より立派。入っていいですかと伺ったら、「どうぞ、私の家に、ようこそ」と言われました。

入るとまずリビングがあり、それも広いリビングで、自分の好きなものが置いてある。風呂（シャワーが主で浴槽は無い）、トイレ、お客さん用のベッドルームもあります。

身体に重い障害があっても、部屋から部屋に移る時には、支援者がするのではなくてリフトを使って、お風呂場に行き、また帰ってくるという風に、また全部の部屋がリモコン一つで動かすことが出来ます。感動したのは、一人ひとりが大切にされていることが、凄く判りました。

私は、日本で、人とふれあうのが嫌でパニックを起こす自閉症者に、一人だけの部屋を与えているのを多くの施設で見学してきました。神戸市の施設協会にも言ったのですが、作業所の横に、段ボールか何か衝立てをして、その人が一人で作業をしている、何かむなしいといつも思っていました。

自閉症者で他人とかかわるのが嫌な方でも、ちゃんと自分で作業スペースがあって、疲れたら休む。そして関わりたくなければ、ずっとかかわらなくてもいい。ガーンと潰したりする方には、専門の部屋があるのです。そこは何をしてもいいので、いらいらしたりすると、こちらの部屋に行こうねという感じでスムーズにその部屋に行って、ガーンと。その部屋は傷が付いてもよく、それも結構広い部屋でした。

コミュニケーションは、「これを今からやりましょう」ではなくて、「これをやったらあなたはこうなりますよ」という次の段階まで示し、その障害の方に理解して頂くコミュニケーションツールが一人ひとりにありました。

今のアイパッドをダウン症の方が上手に使われていました。「私は今からそこに行く」、「行って何をする」とかいう風に上手に使われています。いつも思うのですが、日本で見学に行った時に、この作業は私の子供は無理とって、ダウン症のこの子に視線を当

てて出来るとか出来ないか思っていたが、デンマークでは、どんなに重度の方でも、やる仕事を探して、その方にあったように仕事をしているというのも凄かった。

障害者の方がテレビ局を開設していました。知的障害者の方のステーションなのです。

入っていけば、障害者はすぐ分かります。その方達がみなスターなのです。誇りを持っておられました。私達が見学に戻っていたら、その様子を色々な角度から写真を撮っている方も知的障害者なのです。いろんなところに放送されています。

胴から上が映るよと言ったら、ぱっと、スーツに着替え、下は短パンをはいているのです。テレビに映る所だけ綺麗にちゃんと自分でできる。少しサポートがいるので、お手伝いする方が上手に聞き出したり話しやすいようにされています。

私は気になったので「お休みは何をされるのですか」と伺うと、「彼女とデートします」と。皆薬指に指輪をはめている。

デンマークはどんな仕組みになっているのか竹内さんに伺ったら、国は、教育とか外交などを専門に扱っている（大学）。次に、5つの地域があって、そこは病院、交通、環境を管轄している。98のムーネが基礎的自治体の役割をしている。

日本でいうと、47の都道府県があって、市町村があるのを、デンマークは5つの地域に分けて、その下に98のムーネ、基礎的自治体がある。ムーネに色々な役割を持った方がいるようです。

年金はいくらかと、家族会の方に聞かれました。日本では施設利用料を払い、2万5千円残すと言っているが、絶対残らない。でも、デンマークの知的障害者の年金は、文化的な自分のための遊びに使ったり、洋服を買ったり、彼女たちと遊んだりするために使っている。私達の子供達は、あの狭いGHと言われているホームでないルームで生活している。由岐会長は「日本で生まれたことが間違い」と言っていたが、私もどうしようもなく、神戸で子を産みました。

しかし、今回の旅行で終わらないと思いますので、諦めず、ここは違うよと、親はもっと頑張ろうよと、育成会、全施連とそんな小さな話しをしている場合じゃないよと、ずっと考えながら帰ってきました。

●南副理事長

誤解が無いようにまとめて言えば、徹底的に違うなと思ったのは、デンマークの人達は、歴史を学び、それを教訓にしていますね。ドイツから攻められ、さんざんやられたこと。昔の歴史、或いは今日までの歴史と、自分達の生活はこうあるべきなのだという二つを踏まえて、徹底的に凄いパワーと凄いエネルギーを使って邁進しています。日本と違って、日本は適当なところで妥協していますが、そうではない。

チョンさんの説明の中にもあったのですが、その目標に向かっていくために凄いお金、凄いエネルギーを使っていく、そういう文化を持っていると確信しました。

セノボー・コムーネのボーフォムの人達の説明の中の資料の一つですが、収入が月38万円、内訳は月の年金が34万円、住宅手当4万円。支出でボーフォムの家賃が13万払って、電気水が12千円、光熱費が8700円、交通費2万円、食事代が5万3千円、1クローネ20円として計算。掃除代、洗濯代、税が約7万3千円。収入－支出＝8万3千円ぐらい残る。

ここで判って頂きたいのは、家賃を払っているのです。木村さんが、面会はいつでもいいのですかと聞きました。デンマークの人たちは、怪訝そうな顔をしました。というのは、家賃を払っているから、その人の家です。皆さんの障害の無い子供さんが、アパートを借りていて、そこに親が行くのを面会とは言わないでしょう。そういう感覚です。

完全に本人の家なのです。家賃はコムーネに入ります。循環していると思ったが、あえて質問しました。ボーフォム、共同生活住居（ボーフェレスケブ）を建てる時コムーネが借金をして建てているので、その償還金に充てているそうです。

初めから無料にすることと一緒にようですが、意識として、はっきりさせる。そういうことがしっかりしている。

先程のボーフォムなどの高齢者施設は竹内さんが働いているところです。老人も障害者も同じなのです。前に行った時と同じですが、入所施設の発展なのです。解体ではなく、発展して行って、例えば100人より50人がいいだろう、50人より20人が住みやすいだろうとなってきたのです。

私達が見たボーフォムの人達は5人と5人の一つのくくりの中に、5人のためのリビングがあって、又、5人それぞれの人のリビングがあって、それが一つのホームとなっていて、全部廊下で繋がれている。

昼間は、障害者の人たちは、どこかに出かけているので、その人たちは殆どいないのです。敷地内のデイサービスみたいな所があるのですが、そこに行く。また、色々な所に行っているのです。10人に対して12人の職員。それは夜をしっかりと見る人達です。昼も入れると日本の比ではありません。それが基本にあります。

誤解を招くので注意して下さい。物価が違うのです。ビールが27クローネ、540円。水もお金がかかります。どんないいホテルに泊まっても、ウオッシュレットはありません。家具は昭和初期の家具のようです。決して日常生活は日本と比べ豊かではありません。けれども、セフティーネットに関しては、日本と比べる事が出来ないほど豊かです。

自分もちゃんと分かっていますが、感じる事は、国家予算の使い方が違う。何でも無い、くだらないこともいっぱい質問しました。これはどうしてですかと聞きましたら、「それは人間が生きていくために特に必要ですか」と逆に質問されました。

人間が生きていくのに必要なものについては、惜しみなく予算を使っている仕組み。ここが決定的に違うのだと思いました。だから比較は出来ない、比較論では議論はできない。共同生活住居（ボーフェレスケブ）の一端を取って日本に導入したのがグループホームです。向こうには、もともとグループホームという言葉もないし、そういう形態は前からないと言っていました。

共同生活住居（ボーフェレスケブ）では一人ひとりの家がある。その集合の中に（見る事が出来なかったが）、全員が集まる所があるそうです。ここに、昼間でも職員が常駐している。この職員のしている事は、日本の世話人のような役目ではなく、近隣の人達とのいろんな事の付き合いのためにいる。ここの入居者は外から、日本でいう重度訪問介護支援とか、居宅介護とかいう一人ひとりにあつたものを受けている。先程由岐さんから説明があつたように、ここでうまくいかない時、ボーフォムの方に移った方がいいのではないかという事を説明して、当人がOKすれば移っていく。けれど、ここがいいと言えばここに残る。

自宅にいる人もいるが、それも自己選択の中です。すると、自分が説明にバカバカしい質問だったのは、よく自分も思うのだが、「知的障害者に自己選択させたら、我々から見たら明らかに不幸な方向に行く、だから止めなければいけない」と思い質問したのです。「それが不幸な方に行っても不幸にさせない支援をする」と簡単な答え。本人が自己選択したら、それがうまくいかなかったら、そうならないように、そこでうまく支援を入れていくのだという言い方でした。

それと比べてということですが、比較になると思います。厚労省から出している施設入所支援の障害程度区分をここに表しています。これは、厚労省と去年、一昨年12月意見交換をした時出されたものですが、この中で、仮に区分5と6の人が入所施設から出て、居宅で居宅支援を受けたらどうなるかという事を表している。入所系の区分5と6の人は大体こんな額です。24時間支援を受けたら、これ位の額です。居宅で16時間というのは、8時間は日中活動、生活介護なり受けたらこれ位の額、すると軽く高知市だけで1兆円は超えます。これをデンマークの予算は基本においている。その違いがあるのだらうと思います。

最後になりますが、福祉の事についてはすべて労働法です。何故、労働法かというのと、例えばスーパーマーケットに行きました。スーパーマーケットの人が、自分達から見ると偉そうに椅子に座ってレジを打つ、あれは何かと聞いたら、もしレジを打つ人が立ちっぱなしで仕事をしていて腰痛になったら大変な事です。

つまり、職員の労働条件を物凄く大事にする。施設も住居形態居住施設(ボーフォーム)も共同生活住居(ボーフェレスケブ)も全て労働法。

トイレなども部屋が大きいのですが、労働法から来ている。何故かというのと、トイレの介助するのに両脇から介助しなければならない。後ろから介助しなければいけない場合もあるのでスペースがいる。

全て違うのです。北欧では…とか、自分達を応援してくれている小賀先生、宗澤先生と話をすると「ではのすけ」では駄目なのだと話すのです。“北欧では”とか話す学者が一杯いる。それを「ではのすけ」と言うのだそうです。本当にそう思いました。ただ、学ぶことは一杯ありました。

先程の話しに出ました、アイパッドの話、トイレに行くなどのカードがあって、押す等の補助具は進んでいます。由岐さんがよく言う「民主主義というのは多数決ではない、民主主義とは話しあう事なのだ」(対話が民主主義)という様に本当に徹底しています。

幼稚園にも行きました。私達から見たらそんなに重くない子供たちだけれども、そこではどこも受けてくれない最重度の障害児と言っていました。

そこでインクルージョンの話が出ました。園長が「論理的には判る、しかし、子供達の発達、障害者の事を考えるとインクルージョンだけではすまされない」と話していま

した。そして、統合教育でいくなれば障害児が通ってくる幼稚園は論理的にあり得ないという答え方をしていました。

この考え方は、50年続いているという事でしたので、質問しました。50年続いて教育しているなら、絶対に日本から視察に来ていると思いききましたら、来ていないとのことでした。だから当局はどこを見て学んできてくれているのか、多分コペンハーゲンの辺りをくるくると回っていたのだらうと思います。

最初に自閉の重い方の所を観に行った時、彼らは胸を張って「デンマークで一番進んだやり方を自分達はやっている」と自信を持って言っていました。そういう所に観に行っていないと感じました。どんなに重度の自閉の方でも受け入れている。

それは最終的な問題でしょうが全人格を見ます。どの様な事か、いろいろ話を聞いていて分かったのは、生涯を起点にしている。多分私達はその視点を持っていなかったかもしれないが、ひょっとしたら通所施設だけというのは無いのかもしれない。ある部分だけをしていくのではなく、生涯の事を考えながら、今のここをしていくという感じがしました。

成田から家に帰るまでに、こういう事も聴かなければいけなかった、あれも聴かなければいけなかったという事を考えると、又、行かなければと思いました。もっともっと知りたい、ただこちらの強みは、奥さんに日本語でメールが打てて質問が出来ます。奥さんを通じて、ホルムさんがいろいろな資料をくれるのです。11月に日本に来られるという事ですので、彼らとまだまだお付き合いしていきたい。今回は系統立てて見せてもらいました。以前、高知県に見えた時ホルムさんから、「視（観）察するのであれば子供から老人まで見なさい」と言われた通りにスケジュールを設定していただいた。

●由岐理事長

コムーネの障害政策をどのようにしているかということが、凄く参考になりました。6万人の市民で知的障害者が千数百人、約2%位。その障害者に使う予算が、2%の人のために10%の予算を使っている。セノボー・コムーネがこれから力を入れるのは、自閉症と知的障害者の分野です。他の障害者についても普通にやっていくし、医療と生活を区分して人間とのかかわりを大切にしていきたいという事に力を込めて言われた。

障害者に対してユネスコの規定から外れないように、従って国連の権利条約などは、はるかにクリアーしているレベルの事を、さらに進化させようとしている。

私が一番感心したのは、特別幼稚園というところへ、観に行った時0歳か16歳までの12人の子供を預かっている、そこに職員が12人いる。その内訳はペタゴという保育士が7人、理学療法士、コンサルタント。コンサルタントというとは私はずぐ経営コンサルタントが頭に浮かぶのですが、ソーシャルワーカーです。言語療法士、こういう人達がいる。インクルージョン、統合教育の中で教育しきれない特別な部分の対応が必要であるのです。

そのために、一般の普通児と一緒に学校とか幼稚園に入らず、こういう特別の教育をしてくれる所へ両親が選んで来るのです。

その指導の方法、考え方を聞いていると子供達が大きくなっていったら、うちの子供のような酷い障害者にならないよう、その子に応じた発達の保障を言葉及び身体の面からも、あらゆる面から支援している。

タブレットを使いそこに色々な写真とか絵が出てくる。それを押しながら一つの繋がった言葉になるように、練習するのです。すると、本人が一切喋れなくても、お腹が減った、何を食いたいという風な、それが一つの会話になるように絵・写真を押しながら会話の形が取れるようになっている。以前は写真を持ってきたが、今ではタブレットの画面の絵から、本人がこれだと思うところを押すと絵そのものが出てくる。

自然と意思疎通ができます。0歳の時からこのような教育を受けていれば、我々が見て、この子のどこに障害があるのかと言われるような人間に育っている。

ほとんど感心したのは幼児から老人に至るまで、本人の意思を徹底して尊重する。

自宅とか本人が一人でアパートに住んで支援を受けたいと言えば、親であろうと家族であろうと、誰が何と言おうとも、5時間までの支援が受けられますから本人が其処に住みたいと言えば住みます。

しかし、5時間の支援では一人で暮らせない状態になったら、住居形態居住施設一支援スタッフ常駐（ボーフォム）に移りませんかと言っても、本人が共同生活住居（ボーフェレスケブ）に住みたいと言えば5時間の支援を7時間・8時間の支援に延ばす。そういう柔軟なところがある。それは徹底して本人一人ひとりを大切にする。

日本の憲法に、尊厳とか人格の尊重とか書かれているが、私も皮膚感覚になっている程人間の尊重とか人格という事が自分で身につけていません。しかし、あのデンマークほど一人ひとりの人間を障害があろうが無かろうが、障害者が言う通りにしたら親の立場から見たら、本人のためにはならないと思う事でも、本人がしたいと言えばさせるべ

きですと、それをいい方向に向くような支援を私達が考えなければいけないと、行政マン・施設の長が言われるのです。

どうしたら強制力なしに本人が納得し、意思決定した行動ができるかという事を支援するのが私達の仕事と言われるのです。あれを聞くと、私は日本に絶望です。

●南副理事長

チョンさんなどにお会いした時、由岐さんが障害程度区分の事をちらっと出したのです。向こうも似たような事を言っていました。障害程度区分の事の説明を始めたら、チョンさんはずっと顔色を変えて、「私達は何段階かを考えていますが、その間に、境界線が出てくる。その場合より多くの支援が受けられる様なものにします。そして、そういうものが出来て支援が受けられないことがないようにするものを作っていきます」と言いました。多分、彼らもここが問題点と考えていたのでしょう。向こうから日本の事情を聞かれました。事情に理解が出来ないのではなく、考え方に理解できなかったのではないかと思いました。

ディスカッション、ディスカッションで過ごしました。先程話しました個人の意思を物凄く大事にすると、その反面もあります。憲法記念日にドイツに観光に行ったその時、ドイツに近いところで、竹内さんからここだったという話が出ました。竹内さんが担当していた痴呆の人がこの近くのポーフォムに移って、その人が雨の中でふらふらと道を歩いていたそうです、それを見つけてくれた人が車に乗せ、体を拭いてポーフォムに届けてくれました。

こんなことが、日本で起これば大変な事件です。しかし、向こうはそれも自己決定です。ポーフォムは有難うと言っただけです。

一つすると一つ借りが出来る、それをどうやって埋めるかという作業をしているのですが、日本でいう安全配慮義務は向こうでは薄いようです。

●由岐理事長

本人の意思で決めたので、施設側に何の責任があるのか。本人を最大限尊重すると言っていました。

●南副理事長

これを食べたら糖尿病になるよ、病気になるよと言って、日本はそうしないようにする。彼らのやり方は、そうなるよ、何度も説明しても僕は食べたいと言えばそのまま。

その時も自己決定なのです。多分、文化が違うのでしょうか。そういうものを日本では、安全配慮義務を持たせ、自己決定をという風になると中々答えは出てこない。

向こうは18歳になると親元を離れるという自然な動きをする、親は自分の財産を全部処分して高齢のボフォムに入ったりして子供に頼ることはない。ただ、竹内さんと以前メールでやり取りをした時、日本はお年寄りを何もなくても敬う。向こうは敬うという事はない。対等な関係です。その話しをしたら、デンマークの老人の方は日本に行きたいと言われたそうです。

以上